

幼児の他者理解能力と仲間との内的状態についての会話の関連

Social Understandings and Internal State Talk with Peers in Yong Children.

園田 菜摘

問題

子どもが他者の感情や欲求、意図を理解したり、心の理論を持つことは、社会性を身につけていく上で重要な能力である。これまでの研究では、子どもは18ヶ月までに自分の欲求と他者の欲求が異なることを認識し (Repacholi & Gopnik, 1977)、2～3歳頃までには自分と他者の感情が異なることを理解する (Denham, 1986; Wellman & Banerjee, 1991) ことが示されている。また、心の理論については、誤信念課題と呼ばれるテストによって、多くの子どもは4歳になるまでは他者の現実とは異なる誤った信念について理解することは難しいことが明らかにされている (Wellman et al., 2001)。

近年では、このような子どもの他者理解能力の発達に影響する要因について盛んに調べられており、特に家庭での内的状態についての会話が注目されている。母親が感情について言及することは、子どもの感情理解を促し (La Bounty et al., 2008; Dunn, Brown, & Beardsall, 1991)、40ヶ月時点の子どもの誤信念理解を促すこと (Dunn, Brown, Slomkowski, Tesla, & Youngblade, 1991)、15ヶ月時点で母親が欲求について言及することは、後の子どもの感情理解を促すこと (Taumoepeau & Ruffman, 2006)、母親が「思う」「考える」などの思考状態 (注: これは“metal state”と呼ばれるもので、通常は“心的状態”と訳されるが、本研究では欲求、感情状態といった他の心の状態についても扱うため、区別を明確にするために“思考状態”という言葉で統一して先行研究の表記を行う) について言及することは、子どもの誤信念理解と感情理解を促すこと (Ensor & Hughes, 2008) などが示されている。日本で行われた研究では、ごっこ遊び場面と本読み場面での母親の思考状態

についての言及は子どもの誤信念理解と関連し、本読み場面での思考状態についての言及は子どもの欲求理解と関連することが示されている (園田, 1999)。母親以外では、父親が欲求や感情について言及することは、子どもの誤信念理解を促し (La Bounty et al., 2008)、きょうだいとの感情についての会話は子どもの誤信念理解 (Dunn, Brown, Slomkowski, Tesla, & Youngblade, 1991)、感情理解 (Dunn, Brown, & Beardsall, 1991) を促すことなどが示されている。

内的状態についての会話は家庭以外でも見られ、3歳時点での友だちとの思考状態についての会話は13ヵ月後の誤信念理解を予測し (Hughes & Dunn, 1998)、3歳児の誤信念課題の成績の良さは友だちとの会話における思考状態に関する発話の多さと関連すること (Brown, Donelan-McCall, & Dunn, 1996) が示されている。さらに、子どもの内的状態についての会話や他者理解能力は仲間関係における社会的スキルと関連し、40ヵ月時の感情理解能力や誤信念理解能力は7ヵ月後の友だちとのふり遊びを含む“つながりのあるコミュニケーション”を予測し (Slomkowski & Dunn, 1996)、3～6歳児の誤信念理解は教師が評定する仲間への社会的スキルと関連すること (Watson et al., 1999; 森野・早瀬, 2005)、感情理解は年少児の社会的スキルと関連すること (森野・早瀬, 2005) がそれぞれ示されている。また、思考状態に多く言及することは友だちとの協調的やりとりと関連し (Brown, Donelan-McCall, & Dunn, 1996)、他者の感情状態について言及することが多い子どもは友だちからより好かれる (Fabes et al., 2001) など、内的世界への理解を示す発話は子どもが仲間との対人的なやりとりを構築する上で効果的な役割を果たすことが示唆されている。

このように、幼児期は家庭での内的状態に関す

る会話から内的世界への理解が始まる時期であり、内的世界への理解は仲間とのやりとりにおいてポジティブに働くと考えられる。しかし、幼児期の子どもが仲間とのやりとりの中でどのように他者理解能力を發揮し、それが後の他者理解能力の発達にどのようにつながるのか、といった縦断的な研究についてはまだ数が少なく、不明な点が多い。Hughes & Dunn (1998) は、縦断研究により3歳、4歳、5歳時点において設定場面でのペアとなった仲間との思考状態についての会話、誤信念理解、感情理解について検討し、3歳時点での思考状態についての会話のみが5歳時点での誤信念理解を促すことを明らかにしたが、日本においても同様に、仲間との思考状態に関する会話が後の誤信念理解を促すのか検討を行う必要があるだろう。さらに、設定場面ではなく日常的な友だちとのやりとりの中で、思考状態以外も含めた内的状態について会話をするのが、子どもの内的世界への理解を一層深めていき、後の他者理解能力の発達につながる可能性も十分に考えられる。

そこで本研究では、初めて集団生活を経験する幼稚園年少児を対象に、入園した時点での他者理解能力を測定し、その能力が仲間との日常的なやりとりの中での内的状態への会話においてどのように發揮されるのかを調べ、さらに入園時点での他者理解能力、仲間との内的状態についての会話それぞれが後の他者理解能力の発達にどのようにつながるかについて、縦断的に検討することを目的とする。また、他者理解能力につながる要因として、子どもが33ヵ月時点での母親やきょうだいとのふり遊びが40ヵ月時点での誤信念理解、感情理解能力を予測する (Youngblade & Dunn, 1995) など、ふり遊びの重要性も指摘されている。このことから、本研究では友だちとのふり遊びの中での会話についても併せて取り上げ、ふり遊びが子どもの他者理解能力の発達にどのように関連するかについても検討を行っていくこととする。

方 法

1. 調査対象

本研究では、山形市内の公立幼稚園 (3年保育) の3歳児クラスに新しく入園した子ども21名 (男児10名、女児11名) を対象とした。平均月齢は3歳9ヶ月 (レンジ3歳4ヶ月～4歳2ヶ月) だった。

2. 調査時期

本研究では、仲間関係の中での他者理解能力と子どもの発話との関係を調べるために、面接による他者理解能力の測定を縦断的に2回行い、1回目と2回目の他者理解能力の測定の間には観察による子どもの発話の測定を行った。調査時期は、1回目の他者理解能力の測定が2003年6月、観察による子どもの発話の測定が同年6月～7月、2回目の他者理解能力の測定が同年10月～11月だった。

3. 調査手続き

(1) 他者理解能力の測定

子どもの他者理解能力を測定するために、感情理解能力、欲求理解能力、誤信念理解能力それぞれの測定を個別面接法により行った。測定の順番は、園田 (1999) に準じて、感情理解、欲求理解、誤信念理解の順で行った。

<感情理解能力>感情理解能力の測定については、Denham (1986) を参考にした園田 (1999) に基づき、ラベリング課題と視点獲得課題が行われた。ラベリング課題とは、4つの表情 (喜び、悲しみ、怒り、恐れ) が描かれた4枚の絵が1枚ずつ子どもに提示され、それぞれの顔がどのような気持ちを表しているかが尋ねられ、次に、調査者が「うれしい顔はどれ？」などの質問を行い、子どもに4枚の絵カードから適すると思うものを選ばせるものである。子どもが正答をした場合には2点、ポジティブ/ネガティブの範囲で合っている解答をした場合には1点が与えられた (16点満点)。正答できなかった場合には、調査者が正答を教示した。その後、視点獲得課題が行われた。これは、情動が喚起されるような16個のス

トリーを指人形を用いて調査者が声や動作を使って表現し、主人公である人形がどのように感じているかを子どもに答えさせるものである。16個のストーリーのうち8個は、ほとんどの人と同じ感情を人形も感じるもので（「飼っていた小鳥が死んで悲しむ」など）、残りの8個は、普通感じるのとは逆の感情を人形が感じるという設定である（「医者に注射されることになって喜ぶ」など）。各ストーリーの順序は、子ども毎にランダムに提示されたが、感情の残存効果を考慮して、最後のストーリーはポジティブな感情になるようにした。ストーリーを実演した後、子どもに「この時、この子はどんな気持ちかな？」と尋ね、ラベリング課題で用いた絵カードから適すると思う表情を選ばせた。子どもが正しい表情を選んだ場合は2点、ポジティブ／ネガティブの範囲で合っている表情を選んだ場合は1点が与えられた（32点満点）。

<欲求理解能力> 欲求理解能力の測定については、Bartsch & Wellman（1989）を参考にした園田（1999）に基づき、絵カードに描かれた主人公の行動から欲求を推測させる欲求理解課題が行われた。これは、6枚の絵カードにそれぞれ別々の主人公がある行為をしている絵が描かれており、その絵カードを1枚ずつ提示しながら調査者が主人公の行為を説明し、子どもにその行為の理由を尋ねるものである。6枚の絵カードのうち3枚は通常の欲求を示したものであり（「女の子がアイスクリーム屋に向かって歩いている」など）、残りの3枚は変則的な欲求を示したものである（「ヘビが嫌いな男の子がヘビを触ろうとしている」など）。各カードの順序は、子ども毎にランダムに提示された。調査者が主人公の行為を説明した後、「どうしてこの子はそんなことをしているの？」と尋ね、子どもが主人公の欲求に言及して行為を説明した場合（「～したかったから」「欲しかったから」など）、1点が与えられた（6点満点）。子どもの解答が主人公の欲求に言及したものでなかった場合には、「この子はどうしたいのかな？」と一度だけ促しの質問を行った。

<誤信念理解能力> 誤信念理解能力の測定については、Bartsch & Wellman（1989）を参考にした園

田（1999）に基づき、予測課題と説明課題が行われた。始めに、他者の誤信念が生じる状況を子どもに理解させるために、絵（例えば、色鉛筆）の付いている箱の中身は空で、絵の付いていない箱に中身が入っている、2つの同じ大きさの箱を提示した。まず調査者が「色鉛筆の箱はどちらだと思う？」と子どもに尋ね、どちらかの箱を選ばせ、そして子どもに箱の中身を確認させた。次に、人形を登場させ、子どもの前で他者の誤信念が起こる状況を作った。予測課題では、箱の中身を必要としている人形がどちらの箱を探すかを子どもに予測させた（例えば、「この女の子が色鉛筆でお絵かきをしようと思ってやってきました。この女の子はどちらの箱を探すでしょう？」）。子どもがどちらかの箱を選んだ後で、子どもが中身についての正しい記憶を持っていることを確かめるために、「この箱を開けたら、この子はそれを見つけることはできる？」と尋ねた。説明課題では、人形が、絵は付いているが中身は入っていない箱を開けようとするのを示した後で、「どうしてこの子はこっちの箱を取ったの？」と子どもにその行動の理由を説明させた。子どもが人形の誤信念に言及しなかった場合は、「この子は頭の中でどんな風に思っているの？」と一度だけ促しの質問を行った。子どもが答えた後で、箱の中身の正しい記憶を持っているかを確かめた。課題には4種類の箱（色鉛筆、バンドエイド、粘土、ピーナッツ）が使われ、それぞれ同じ大きさの何も描かれていない箱と組み合わせて提示した。それぞれ4つの箱について、予測課題と説明課題とが交互になるように3回ずつ順番に行っていったが、子どもが何も描かれていない箱に必ず中身が入っていると単純に考えないように、3番目の箱については絵が描かれている方に実際に中身を入れ、分析には入れなかった。そのため、予測課題が計4回、説明課題が計5回行われた。同じ種類の箱については、課題毎に異なる人形を用い、箱の種類は子ども毎にランダムな順序で提示された。予測課題では、子どもが正しい箱（絵が描かれているが中身の入っていない箱）を選ばないと予測した場合に1点が与えられ（4点満点）、説明課題では、子どもが人形の誤信念に言及して説明した場合（例え

ば、「この子はこっちの箱に色鉛筆が入っていると思っているから」、1点が与えられた(5点満点)。

(2) 発話の測定

自然場面での子どもの発話を測定するために、幼稚園の自由遊び場面での観察調査を行った。子ども1名に対する1回の観察時間を15分間とし、3回(計45分間)の観察をそれぞれ別の日に行った。3名の観察者がそれぞれ1名ずつ子どもに付き、子どもの会話や独り言を全てICレコーダーに録音し、それと同時に子どもの行動や一緒に遊んでいる友達、保育者とのやりとりなどを記録用紙に記入した。3回の観察において、できるだけ1人の子どもに同じ観察者が付かないよう配慮された。観察された記録から、子どもの発話を全てプロトコルに起こし、発話数、内的状態言葉、ふり・見立て発話について、プロトコルから分析を行った。

〈発話数〉発話数については、子どもの発話の数を文単位でカウントした。

〈内的状態言葉〉内的状態言葉については、Brown & Dunn (1991)を参考にした園田・無藤(1996)に基づき、欲求(ほしい、～したい、など)、感情状態(嬉しい、悲しい、嫌い、恥ずかしい、など)、思考状態(知っている、思う、わかる、など)の3つに分けて、それぞれの内的状態言葉の発話頻度をカウントした。

〈見立て・ふり発話〉見立て発話とは、ある物を別の物に見立てている発話のことであり(例えば、砂遊びで「今、川を作っています」、粘土遊びで「これ、ハートのクッキーだよ」など)、その頻度をカウントした。ふり発話とは、ごっこ遊び場面などで何かになりきって発している言葉であり(例えば、運転手になりきって「みなさん、降りてください」、お店屋さんごっこで「ミルクティー飲んでください」など)、その頻度をカウントした。

これらの発話の分析については、1人の評定者が分析した後で、もう1人の評定者が全体の

30%を独立して評定した。その結果、2人の評定者間の一致率は全てカッパ係数0.86以上だった。

結果

1. 子どもの月齢・性別との関連

1回目と2回目の他者理解の課題場面(感情理解、欲求理解、誤信念理解)、観察場面での発話(発話数、内的状態言葉、見立て・ふり発話)について、子どもの月齢、性別との関連があるかどうかの分析を行った。

まず月齢については、相関分析の結果、観察場面でのふり発話($r=.47, p<.05$)、誤信念理解の2回目の予測課題($r=.45, p<.05$)との間にそれぞれ正の相関が示され、月齢が高いほど自由遊び場面でのふり発話が多く、2回目の予測課題の成績が高いことが示された。

性別については、観察場面での内的状態言葉への言及についてのみ性差が示され、女兒の方が男児よりも自由遊び場面で欲求に言及することが多いことが示された(女兒： $M=15.00, SD=12.87$ 、男児： $M=5.27, SD=3.58, t=2.31, p<.05$)。

2. 1回目と2回目の他者理解能力間の関連

本研究では、4～5ヶ月の期間をあけて、同一の他者理解課題を2回行っているため、1回目と2回目の得点間に高い関連が示される可能性がある。そこで、1回目と2回目の他者理解課題の得点間の相関を見たところ(Table1参照)、同一の課題内で相関が示されたのは、感情理解の視点獲得課題と誤信念理解の説明課題のみだった。一方、1回目の感情理解(ラベリング課題と視点獲得課題)の得点が高いと2回目の誤信念理解の説明課題の得点が高く、1回目の欲求理解課題の得点が高いと2回目の感情理解(ラベリング課題と視点獲得課題)の得点が高く、1回目の誤信念理解の説明課題の得点が高いと2回目の感情理解の視点獲得課題、誤信念理解(予測課題、説明課題)の得点が高くなることが、それぞれ示された。

Table1. 1回目と2回目の他者理解能力の相関

	〈1回目の他者理解能力〉					
	感情理解		欲求理解	誤信念理解		
	ラベリング	視点獲得		予測	説明	
〈2回目の他者理解能力〉						
感情理解	ラベリング	.35	.11	.48*	-.12	.04
	視点獲得	.51*	.68**	.70**	-.04	.55*
欲求理解		.36	.28	.28	.18	.35
誤信念理解	予測	.29	.27	-.02	.13	.59**
	説明	.61**	.52*	.41+	-.07	.66**

** p<.01, * p<.05, + p<.10

3. 他者理解能力と発話との関連

他者理解能力の高さがその後の自由遊び場面での発話とどのように関連するかについて、まず1回目の他者理解能力と発話との相関についてを調べた。その結果 (Table2 参照)、感情理解のラベリング課題の得点が高いほど、自由遊び場面での発話総数、欲求への言及、ふり発話が多いことが

それぞれ示された。また、欲求理解の得点が高いほど、自由遊び場面でのふり発話が多いことが示された。さらに、誤信念理解の説明課題の得点が高いほど、自由遊び場面での発話総数、欲求への言及、思考状態への言及、ふり発話が多いことがそれぞれ示された。

Table2. 1回目の他者理解能力と発話の相関

	〈1回目の他者理解能力〉					
	感情理解		欲求理解	誤信念理解		
	ラベリング	視点獲得		予測	説明	
〈自由遊び場面での発話〉						
発話総数		.49*	.11	.42+	-.27	.68**
内的状態言葉	欲求	.44*	-.07	.23	-.15	.58**
	感情状態	.34	.24	.34	-.24	.24
	思考状態	.01	-.31	-.05	.06	.45*
見立て・ふり発話	見立て	-.05	.03	.08	-.07	.18
	ふり	.46*	.10	.52*	-.13	.63**

** p<.01, * p<.05, + p<.10

次に、自由遊び場面での発話とその後の他者理解能力にどのように関連するかについて、発話と2回目の他者理解能力との相関について調べた。その結果 (Table3 参照)、自由遊び場面での発話総数は、その後の感情理解の視点獲得課題、誤信念理解の説明課題の得点の高さとそれぞれ関連することが示された。また、自由遊び場面での欲求

への言及が多いほど、その後の誤信念理解 (予測課題、説明課題) の得点が高いことが示された。さらに、自由遊び場面でのふり発話の多さは、その後の感情理解の視点獲得課題、誤信念理解の説明課題の得点の高さとそれぞれ関連することが示された。

Table3. 2回目の他者理解能力と発話の相関

	〈2回目の他者理解能力〉				
	感情理解		欲求理解	誤信念理解	
	ラベリング	視点獲得		予測	説明
〈自由遊び場面での発話〉					
発話総数	.32	.48*	-.05	.37	.63**
内的状態言葉					
欲求	.28	.20	.15	.61**	.48*
感情状態	.39+	.37	.02	-.16	.18
思考状態	.09	-.03	-.13	.13	.35
見立て・ふり発話					
見立て	.10	.07	.04	.11	.05
ふり	.27	.57**	.20	.32	.46*

** p<.01, * p<.05, + p<.10

4. 他者理解能力の伸びとの関連

子どもの他者理解能力と自由遊び場面での発話との関連についてさらに詳細に検討するため、実際に4～5ヶ月の間に子どもの他者理解能力が

伸びたかどうかについて調べたところ (Table4 参照)、誤信念理解の予測課題以外の全ての課題において、2回目の得点の方が1回目の得点よりも有意に高いことが示された。

Table4. 1回目と2回目の他者理解能力の平均値の差の検定

	〈1回目〉		〈2回目〉		t 値
	ラベリング	視点獲得	ラベリング	視点獲得	
〈他者理解能力〉					
感情理解					
ラベリング	10.43(2.66)	12.43(1.40)	10.43(2.66)	12.43(1.40)	3.62**
視点獲得	16.62(5.11)	21.67(5.87)	16.62(5.11)	21.67(5.87)	5.19**
欲求理解					
ラベリング	2.95(1.83)	4.29(1.95)	2.95(1.83)	4.29(1.95)	2.70*
誤信念理解					
予測	.33(.58)	.52(.87)	.33(.58)	.52(.87)	.89
説明	.81(1.75)	1.52(1.99)	.81(1.75)	1.52(1.99)	2.11*

** p<.01, * p<.05

そこで、子どもの一人一人の2回目の他者理解課題の得点から1回目の他者理解課題の得点をそれぞれ差し引き、子どもの他者理解能力の「伸び」とした。この他者理解能力の「伸び」と子どもの月齢、性別との関連について調べたところ、月齢、性別との間には有意な関連は見られなかった。

次に、他者理解能力の「伸び」と自由遊び場面での発話との関連について調べた結果 (Table5 参照)、感情理解の視点獲得課題の「伸び」は発話

総数、ふり発話と関連すること、誤信念理解の予測課題の「伸び」は発話総数、欲求への言及と関連することが、それぞれ示された。そこで、発話総数を制御変数とした偏相関を行ったところ、視点獲得課題の「伸び」とふり発話の間には有意ではないが正の相関がある傾向があり ($r=.45, p<.10$)、予測課題の「伸び」と欲求言葉への言及の間には有意な正の相関がある ($r=.50, p<.05$) ことが、それぞれ示された。

Table5. 他者理解能力の伸びと発話の相関

	〈他者理解能力の伸び〉					
	感情理解		欲求理解	誤信念理解		
	ラベリング	視点獲得		予測	説明	
〈自由場面での発話〉						
発話総数	-.35	.51*	-.39+	.49*	.02	
内的状態言葉	欲求	-.29	.33	-.05	.64**	-.07
	感情状態	-.18	.20	-.28	-.01	-.06
	思考状態	.07	.31	-.05	.16	-.10
見立て・ふり発話	見立て	.13	.05	-.03	.15	-.16
	ふり	-.32	.64**	-.25	.37	-.18

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

考 察

本研究では、集団生活に入ったばかりの幼稚園年少児を対象に、他者理解能力の発達と仲間との自由遊び場面での内的状態、ふりに関する発話との関連について、縦断的な検討を行った。

他者理解能力の発達については、1回目と2回目の他者理解能力の平均値が誤信念理解の予測課題以外の課題ですべて有意に高くなることが示され、集団生活に入ってからわずか4～5ヵ月の間に子どもの他者理解能力が全般的に発達していくことが示唆された。他者の誤信念を理解することは4歳になるまでは難しいとされているが (Wellman et al., 2001)、2回目の他者理解課題の測定が行われた10～11月には半数以上の子ども

が4歳を過ぎていたため、誤信念課題の説明課題においては理解が進み、得点が高くなった可能性が考えられる。誤信念課題の予測課題では同様の発達が見られなかったが、その理由として課題そのものの難しさが反映した可能性が考えられる。同じ課題を用いた先行研究 (Bartsch & Wellman, 1989) においても、説明課題において3歳児の66%が誤信念理解を示したが、予測課題では誤信念理解を示した子どもは31%しかいなかった。この理由として、説明課題は他者が誤信念に基づいた行動を行ったのを見せた上でその行動の理由を説明させる課題であるが、予測課題は誤信念が起こる状況のみを呈示し他者の行動を予測させる課題であったため、より厳密な他者の誤信念に対する理解が必要とされるため、誤信念理解が始ま

る3～4歳頃の子どもにとってはより難しい課題だったのではないかと考えられる。

他者理解能力と仲間との自由遊び場面での発話との関連については、本研究では仲間とのやりとりにおける欲求についての言及の重要性が示唆された。1回目の感情理解のラベリング課題、誤信念理解の説明課題の得点の高さは仲間に対する欲求の言及の多さに関連し、仲間への欲求への言及の多さは2回目の誤信念理解の予測課題、説明課題両方の高さに関連することが示された。また、1回目と2回目の他者理解能力の間の得点の「伸び」についても、欲求への言及が誤信念理解の予測課題の「伸び」と有意に関連することが示された。先行研究では、3歳児の誤信念理解は友だちとのペアでのやりとりにおける思考状態への言及に関連することや (Brown, Donelan-McCall, & Dunn, 1996)、3歳児が母親とのごっこ遊び場面において欲求に多く言及することは欲求理解と関連することが示されているが (園田, 1999)、本研究の結果は、年少児の感情理解、誤信念理解が仲間との自由遊び場面での欲求への言及を媒介にして後の誤信念理解につながる、といった一連の流れが存在する可能性を示唆していると考えられる。欲求は人の行為を決定する重要な要因の一つであるが、仲間とのやりとりにおいて自分とは異なる他者の欲求に気付き、欲求への言及を行っていくことは、より高度な他者の内的世界である誤信念理解につながるのかもしれない。

さらに本研究では、仲間とのふり遊びの中での見立て発話、ふり発話についても取り上げて検討を行った。その結果、1回目の感情理解のラベリング課題、欲求理解、誤信念理解の説明課題それぞれの得点の高さが後のふり発話の多さに関連し、ふり発話の多さは2回目の感情理解の視点獲得課題、誤信念理解の説明課題の得点の高さに関連することが示された。このことから、他者理解とふり遊びにおけるふり発話との間には密接なつながりがある可能性があると考えられる。先行研究では、他者理解能力とふり遊びの関連について、40ヵ月時点での感情理解、誤信念理解は7ヵ月後の友だちとのふり遊びを含むコミュニケーションと関連すること (Slomkowski & Dunn, 1996)、

子どもが33ヵ月時点で母親やきょうだいとふり遊びを行うことは40ヵ月時点での感情理解、誤信念理解と関連すること (Youngblade & Dunn, 1995) などがすでに示されている。これは、ふりをすることは心の理解につながる多くのスキルを必要とするため (例えば Leslie, 1987; Lillard, 1993 など) と考えられているが、本研究の結果から、3歳頃の感情や誤信念理解は子どものふり遊びの中のふり発話の多さにつながり、このようなふり発話を行う経験を多く積み重ねることによって、4歳以降に獲得する他者の誤信念に対する理解が発達していく可能性が示唆されると考えられる。

以上のように、本研究では他者理解能力が発達していく年少児について検討し、集団生活が始まる最初の頃の感情理解、誤信念理解の能力がその後の仲間との自由遊び場面における欲求への言及、ふり発話の多さと関連し、それぞれの発話の多さは4歳以降に獲得される後の誤信念理解の能力に関連することが示唆された。しかし、本研究の対象の人数が少なかったため、相関による結果しか示すことができなかったという問題が残る。今後は対象の人数を増やし、他者理解能力が仲間との内的状態についての会話につながり、内的状態についての会話が後の他者理解能力へとつながっていく様相について、モデル図を用いた分析を行っていく必要があるだろう。また、本研究において“ふり発話”の重要性が新たに指摘されたが、仲間との自由遊び場面の観察における発話しか分析されていなかったため、発話が無くても誰かのふりをするなど“ふり遊び”に従事している時間についても検討を行い、“ふり遊び”に従事していることそのものが重要なのか、あるいは遊びの中で“ふりに関する発話”をしていることが重要なのか、今後は詳細に明らかにしていかなければならないだろう。

引用文献

- Bartsch, K., & Wellman, H. (1989). Young children's attribution of action to beliefs and desires. *Child Development*, 60, 946-964.
- Brown, J., Donelan-McCall, N., & Dunn, J. (1996).

- Why talk about mental states? The significance of children's conversations with friends, siblings, and mothers. *Child Development*, 67, 836-849.
- Brown, J., & Dunn, J. (1991). 'You can cry, mum': The social and developmental implications of talk about internal states. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, 237-256.
- Denham, S. A. (1986). Social cognition, prosocial behavior, and emotion in preschoolers: Contextual validation. *Child Development*, 57, 194-201.
- Dunn, J., Brown, J., & Beardsall, L. (1991). Family talk about feeling states and children's later understanding of others' emotions. *Developmental Psychology*, 27, 448-455.
- Dunn, J., Brown, J., Slomkowski, C., Tesla, C., & Youngblade, L. (1991). Young children's understanding of other people's feelings and beliefs: Individual differences and their antecedents. *Child Development*, 62, 1352-1366.
- Ensor, R., & Hughes, C. (2008). Content or connectedness? Mother-child talk and early social understanding. *Child Development*, 79, 201-216.
- Fabes, R., Eisenberg, N., Hanish, L., & Spinrad, T. L. (2001). Preschoolers' spontaneous emotion vocabulary: Relations to likability. *Early Education & Development*, 12, 11-27.
- Hughes, C., & Dunn, J. (1998). Understanding mind and emotion: Longitudinal associations with mental-state talk between young friends. *Developmental Psychology*, 34, 1026-1037.
- LaBounty, J., Wellman, H., & Olson, S. (2008). Mothers' and fathers' use of internal state talk with their young children. *Social Development*, 17, 757-775.
- Leslie, A. (1987). Pretense and representation: The origins of "Theory of Mind". *Psychological Review*, 94, 412-426.
- Lillard, A. (1993). Pretend play skills and the child's theory of mind. *Child Development*, 64, 348-371.
- 森野美央・早瀬円 (2005). 幼児期における心の理論、感情理解、及び社会的スキルの関連. *乳幼児教育学研究*, 14, 21-30.
- Repacholi, B., & Gopnik, A. (1997). Early reasoning about desires: Evidence from 14- and 18-month olds. *Developmental Psychology*, 34, 1017-1025.
- Slomkowski, C., & Dunn, J. (1996). Young children's understanding of other people's beliefs and feelings and their connected communication with friends. *Developmental Psychology*, 32, 442-447.
- 園田菜摘 (1999). 3歳児の欲求、感情、信念理解: 個人差の特徴と母子相互作用との関連. *発達心理学研究*, 10, 177-188.
- 園田菜摘・無藤隆 (1996). 母子相互作用における内的状態への言及: 場面差と母親の個人差. *発達心理学研究*, 7, 159-169.
- Taumoepeau, M., & Ruffman, T. (2006). Mother and infant talk about mental states relates to desire language and emotion understanding. *Child Development*, 77, 465-481.
- Watson, A., Nixon, C., Wilson, A., & Capage, L. (1999). Social interaction skills and theory of mind in young children. *Developmental Psychology*, 35, 386-391.
- Wellman, H., & Banerjee, M. (1991). Mind and emotion: Children's understanding of the emotional consequences of beliefs and desires. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, 191-214.
- Wellman, H., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory of mind development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 655-684.
- Youngblade, L., & Dunn, J. (1995). Individual differences in young children's pretend play with mother and sibling: Links to relationships and understanding of other people's feelings and beliefs. *Child Development*, 66, 1472-1492.